



Title	コリャーク語の不定詞と副動詞を兼務する形式について
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 13, 193-211
Issue Date	2023-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89067
Type	bulletin (article)
File Information	10_Kurebito.pdf



[Instructions for use](#)

コリヤーク語の不定詞と副動詞を兼務する形式について¹

呉 人 恵

(北海道立北方民族博物館)

キーワード：コリヤーク語、不定詞、副動詞、統語的結合度、動詞の副詞的用法

1. はじめに

コリヤーク語 (Koryak: チュクチ・カムチャツカ語族)²では、動詞語幹に場所格接辞に由来する *-k/-kkə*³ が付加された形式 (以下、「K 形」) が、「不定詞 инфинитив/infinitive」と「副動詞 деепричастие/converb」を兼務するとされる (Жукова 1972)⁴。本稿では、K 形が同じ形式でありながら、このように2つのカテゴリーに分けられる根拠を統語的側面から探る。その際、主に筆者がこれまで収集したテキストデータ (Kurebito ed. 2014, 2016, 2017, 2018, 2019) に依拠して分析をおこなう。

K 形を「不定詞」と「副動詞」に分けるのは、コリヤーク語だけでなく同系のチュクチ語やアリュートル語でも同様である。А.Н.Жукова (コリヤーク語)、П.Я.Скорик (チュクチ語)、А.Е.Кибрик 等 (アリュートル語) といったロシア人言語学者たちが、こぞってロシア語文法の記述に倣って採用したものと思われる。しかし、ロシア語では「不定詞」は *-ть/-чь*、「副動詞」は *-я/-а* (不完了体副動詞)、*-в(-вши)/-ши* (完了体副動詞) と形式が異なり、両者を区別する形態的根拠が明確である。一方、コリヤーク語では (同系のチュクチ語、アリュートル語でも)、同一形式でありながら、ロシア語を踏襲して区別を自明のものとしてとらえ、両者の違いを必ずしも明確かつ客観的な根拠によって示してこなかった。

しかし、「不定詞」K 形は主動詞 (以下、英訳の ‘main verb’ を略して ‘MV’ と呼ぶ) と共起する場合、実際にはロシア語のように名詞的あるいは形容詞的⁵にふるまうことはなく、

¹ 本稿は、科学研究費基盤研究 (B)「環北太平洋危機言語の形成プロセスの解明に向けた地域類型論の構築」(22H00657、代表：呉人恵)の研究成果である。本稿が利用しているコリヤーク語のテキストデータ (Kurebito ed. 2014, 2016, 2017, 2018, 2019) の編集にあたり、その解釈については、Аятгинина Татьяна Николаевна さん (1955 年、ロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性) に数多くのご教示をいただいた。ここに心より謝意を表したい。また、イテリメン語について貴重な情報を提供して下さった小野智香子氏 (北海学園大学) にも心からお礼申し上げる。

² 本稿で対象とするのは、マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区に分布するコリヤーク語チャウチュヴァン (Cawcəvan) 方言である。

³ *-k/-kkə* は K 形の 2 つの異形態である。後者の *-kkə* は CV 語幹に付加され (e.g. *ju-kkə*「食べる (他動詞)」、*va-kkə*「ある」)、それ以外の語幹には *-k* が付加される (e.g. *ewji-k*「食べる (自動詞)」、*vetat-ə-k*「働く」)。

⁴ Nedjalkov (1995) は世界の副動詞をその機能の数により、「単一機能副動詞」から「5 機能副動詞」までの 5 タイプに分けているが、チュクチ語はこのうち、不定詞を兼務する「2 機能副動詞」であるとしている。すなわち、K 形のことである。

⁵ Ярцева и др. ред. (1990:198) によれば、ロシア語の不定詞は、使役動詞、法動詞、局面動詞に従属する述語を表わすのに最もよく用いられる。さらに、主語や述語として (a. *Курить-здоровью вредить*. 「喫煙は健康に悪い」)、複合述語の一部として (b. *Его мечта-побывать в Африке*. 「彼の夢はアフリカに行くことだ」)、主要部名詞との一致のない修飾語として (c. *Он говорил о своем желании уехать в город*. 「彼は都会に行く希望を語ってくれた」)、複合文の主要メンバーとして (d. *Не входить*. 「立ち入り禁止」)、目的節として (e. *Пошел купить хлеба*. 「彼はパンを買いに行った」) も用いられるという。ここでいう「名詞的」というのは、a. b. のような例、「形容詞的」というのは、c. のような例を指す。

もっぱら副詞的にふるまう。その意味では、「副動詞」とも連動している。

そこで、本稿では、コリャーク語では両者を区別する根拠があるのかないのか、もし仮にあるとすれば、それはどのような特徴にみられるのかについて考察を加える。その際、K形とMVの統語的な結合の仕方が両者の違いにかかわっている可能性を想定して、1) K形とMVの配列順序、2) K形とMVが取る名詞項の同一性の有無、3) K形とMVの間に配置可能な語という3つの観点からこれを検証する。

本稿の以下の構成は次のとおりである。第2節では、一般にコリャーク語で認められている「不定詞」と「副動詞」がどのようなものかを概観する。第3節では、両者の関係について言及した先行研究として、コリャーク語の Жукова (1972)、同じくK形を持つ同系のチュクチ語の Скорик (1977)、Dunn (1999) を取り上げ、それぞれの記述の妥当性と問題点を洗い出す。第4節では、Kurebito (ed.) (2014, 2016, 2017, 2018, 2019) からK形を網羅的に収集し、そのふるまいを上述の3つの統語的観点から観察する。第5節では、結論を述べる。

なお、考察に先立ち、3点断り書きをしておく。第一に、諸般の事情により現地調査ができないため、本稿はもっぱら既存のデータの分析に終始する。大枠の結論の妥当性は動かないと考えるが、少数の逸脱例を正確に説明するためには、エリシテーションによる周到かつきめ細やかなデータの分析が不可欠である。そのためには現地調査の再開を俟つ以外ない。第二に、本稿では上述のアリュートル語、同系とされるイテリメン語については言及しない。アリュートル語については、Kibrik et al. (2004) には本稿の論点にかかわる特筆すべき記述が見当たらないためである。一方、イテリメン語については、不定詞と副動詞には形式上区別があり、いずれも場所格接尾辞とは明確に関係づけられないためである (小野 2021) ⁶。第三に、以後、先験的に「不定詞」「副動詞」というカテゴリーを想定することはせずに考察を進めるが、記述の煩雑さを避けるため、「」は外す。

2. 不定詞 K 形・副動詞 K 形

不定詞は、一般にヨーロッパの諸言語で、定形動詞の人称・数などの文法カテゴリーを持たず、できごとの過程を抽象的・一般的に表現する準動詞のことを指す文法用語として用いられてきた。本来、ギリシア語の ἀπαρέμφατος 「指示されていない」「不定の」法、すなわち時制、アスペクト、法、人称・数といったカテゴリーを持たないという意味の用語に由来することは周知のとおりである (亀井等編 1996:1148)。ヨーロッパの言語以外の文法記述においても、類似の形態的・統語的特徴を有する形式に対してこの用語が用いられることがある。コリャーク語のK形もそのひとつである。

従来のコリャーク語の文法記述で不定詞K形とされるのは、(1)の「始める」のような局面動詞や(2)の「できない」⁷のような不可能動詞がMVとして共起する場合である。(1)(2)はともにK形が自動詞の例であるが、K形自体は「不定」であるため、主語の人称・数はMVの側に標示される。以下の例では、該当する不定詞の部分は太字で示す⁸。

⁶ 小野 (2021) の著者の小野智香子氏 (私信) も、イテリメン語の不定詞 *-kes/-s* と副動詞 *-ki, -l* は別のものので、他の同系言語の不定詞・副動詞と同列に論じることはできないとされている。

⁷ コリャーク語には、「できる」を意味する可能動詞はなく、「できない」を意味する *pkav* のみが存在する。

⁸ 本稿における例文で、Kurebito ed. (2014, 2016, 2017, 2018, 2019) から引用したものは、引用元を明記する

- (1) *vəʃajok* *ɣəmmo* *t-ə-mejnet-ə-k*, *to* *t-ə-ŋvo-k* ***vetat-ə-k***.
 later 1SG.ABS 1SG.S-E-grow.up-E-1SG.S and 1SG.S-E-begin-1SG.S work-E-LOC
 「その後、私は成長して、働き始めた」 (2014:4-122)
- (2) *əlla* *unmæk* *ko-ŋoci-cʃat-ə-ŋ*, *ləyan* *ko-pkav-ə-ŋ*
 mother(ABS.SG) badly IPFV-be.angry-DUR-E-IPFV even IPFV-be.unable-E-IPFV
vayal-ə-k.
 sit-E-LOC
 「母はひどく怒っていて、座ることもできなかった」 (2019:74-35)

ちなみに、(1) の *ŋvo* 「始める」、(2) の *pkav* は自他同形である。K 形が他動詞の場合には、MV が K 形の取る主語と目的語の人称・数を標示する。(3) では MV である *ŋvo* の反転動詞マーカー *na-* により K 形の主語が 3 人称複数であることが、*-naw* により目的語が 3 人称複数、すなわち *miml-u* 「ヴォッカ」や *spirta-w* 「スピリット」であることが標示される。(4) では、MV である *pkav* の反転動詞マーカー *na-* により K 形の主語が 3 人称複数であることが、*-n* により目的語が 3 人称単数、すなわち *ʃətʃ-ə-n* 「犬」であることが標示される。

- (3) *vəʃajok* *na-ŋvo-naw* ***jet-ə-k*** *meŋqo* *amu* *miml-u*⁹, *spirta*¹⁰-*w*.
 later INV-begin-3PL.P bring-E-LOC from.where probably water-ABS.PL spirit-ABS.PL
 「その後、彼らはどこからかヴォッカやスピリットを運んでくるようになった」 (2014:4-445)
- (4) *na-ko-pkaw-ŋ-ə-n* ***təm-ə-k*** *ʃətʃ-ə-n*.
 INV-IPFV-be.unable-IPFV-E-3SG.P kill-E-LOC dog-E-ABS.SG
 「彼らは犬を殺すことができなかった」 (2018:66-68)

この他、自他同形の MV には、*plitku* 「終わる／終える」がある。一方、次の (5) では自動詞 *ʃenqev* 「やめる」が MV として現れているが、(6) では使役化により他動詞化した *n-ʃenqev* 「やめる」が MV として現れている。(5) では MV である *ʃenqev* の *t-* により K 形の主語が 1 人称単数であることが標示される。(6) では MV である *n-ʃenqew* の *mət-* により K 形の主語が 1 人称複数、*-new* により K 形の目的語が 3 人称複数 (明示されていないが、複数の毛皮) であることが標示される。

- (5) *to* *ŋanqo* *pəce* *t-ə-ʃenqev-ə-k* ***cetkejuŋ-ə-k*** *ʃətʃ-ə-ɣakanje-kjet*.
 and after.that for.the.time.being 1SG.S-E-stop-E-1SG.S think-E-LOC dog-E-sledge-CA
 「そしてそれから、私はしばらく犬橇について考えるのをやめた」 (2016:17-19)

(コロン直前の数字は刊行年、直後の数字はテキスト番号、ハイフンの右側の数字はテキスト内に出現する文の番号である)。特に明記していない例は、筆者が、現地調査が可能であった時にエリシテーションにより採集したものである。

⁹ *miml* 「水」が複数接辞を取るのは、容器に入った場合である。

¹⁰ 例文中のロシア語からの借用語は、イタリックで示す。

- (6) vitku mət-ku-n-ʕenqew-ŋ-ə-new jəməlki-k.
 only.then 1PL.A-IPFV-CAUS-stop-IPFV-E-3PL.P process.fur.skin-LOC
 「こうして初めて、私たちは（毛皮の）加工をやめる」 (2016:22-24)

このようにコリヤーク語では、MV は K 形が取る名詞項を標示するのであって、K 形自体を名詞項として取るわけではない。したがって、K 形には名詞的用法はない。また、形容詞的用法も管見の限り見当たらない。

次に、副動詞 K 形について見る。副動詞は、副詞節を作ることの主たる機能とする非定形動詞である (Haspelmath 1995)。Anderson (2006) はシベリア諸言語に共通する特徴のひとつとして、副詞節化の標識として格接辞が用いられることを指摘し、①名詞化を経て格接辞と結びつくタイプ（「名詞化タイプ」）、②裸の動詞語幹あるいは（半）定形動詞が格接辞と直接結びつくタイプ（「非名詞化タイプ」）の2つのタイプがあることを指摘している。コリヤーク語には、「名詞化タイプ」と、裸の動詞語幹が格接辞と結びつく「非名詞化タイプ」がある（呉人 2016）。K 形は、このうち非名詞化タイプに該当する。

裸の動詞語幹と結びつき副詞節を形成する格接辞は、場所格 (-k/-kkə) だけではない。道具格 (-e/-a/-te/-ta)、与格 (-ŋ)、共同格 (-ma)、随格 (yejqə-/yajqə...-e/-a/-te/-ta) も副詞節を形成するのに用いられる。このうち最も広い意味範囲を表わすのが場所格で、時間節、原因節、順接条件節、逆接条件節に用いられる。道具格は時間節、原因節、様態節に用いられる。与格は様態節、引用節を導く副詞節、共同格と随格は同時性を表わす時間節に用いられる（具体例は呉人 2016 を見られたい）。

以下、副動詞 K 形の例を挙げる。(7) は時間節、(8) は原因節、(9) は順接条件節、(10) は逆接条件節の例である。(7) の kəta 「その時初めて」、(8) の məjew 「なぜなら」、(9) の ekilu 「もし」、(10) qej/qəʕewən 「たとえ」は語彙的接続詞であり必須ではないため、() で括る。

- (7) (kəta) en'pici-w wojv-ə-ŋqo jet-ə-k vitku məc-ca-jaly-ə-la-ŋ
 only.when father-ABS.PL village-E-ABL come-E-LOC only.then 1PL.S-POT-move-E-PL-POT
 ŋalvəʕ-etəŋ.
 reindeer.herd-ALL
 「両親たちが村から戻ってきた後で、群れに移動しよう」
- (8) (məjew) yəm-nin lewət təʕəl-ə-k vetat-ə-nv-etəŋ ecyi qəjəm
 because 1SG-GEN(ABS) head(ABS.SG) ache-E-LOC work-E-place-ALL today not
 m-ə-lqət-ə-k.
 1SG.S.OPT -E-go-E-1SG.S.OPT
 「私は、今日は頭が痛いので、仕事には行かない」
- (9) (ekilu) kəmiŋ-ə-n yətʕev-ə-k to ewənʕət ənno ja-tejŋ-ə-ŋvo-ŋ.
 if child-E-ABS.SG get.hungry-E-LOC and anyway 3SG.ABS POT-cry-E-INH-POT
 「子供はもしお腹がすいたら、泣き出すだろう」
- (10) (qej/ qəʕewən) unmək pəkav-ə-k ewəncam ya-ja-vetan-ŋəvo-ta.
 even.if even.if very.much be.unable-E-LOC anyway COM-try-work-HAB-COM

「ちゃんとできなくても、とにかく頑張りなさい」

3. 先行研究

3.1. Жукова (1972)

Жукова (1972) は、コリヤーク語の非定形動詞を不定詞、副動詞、形動詞 (причастие)、目的分詞 (супин) に分類し、これらを「動詞の名詞的形式 (именные формы глагола)」と呼んでいる。ここで「名詞的」というのは、名詞項になるという意味ではなく、動詞語幹に格接辞が付加するにより形成されているためである。このうち、不定詞は意味、形態、統語的観点から次のようにとらえている。

- ① 一般に認められているように¹¹、動作を最も一般的な意味で表わす。
- ② 時制・アスペクト・法や人称・数のカテゴリーを持たない。
- ③ 名詞項に対する支配は保持している。

不定詞 K 形と共起する MV については、Жукова (1960) は、ηvo 「始める」、plitku 「終わる」、pkav 「できない」、ʒenqev 「やめる」、γajmat 「ほしい」などを挙げている。また、Жукова (1972) の不定詞 K 形の例文には、plvi 「命ずる」、enavetav 「邪魔する」、inʒanqacʒaw 「思いとどまらせる」、jγajmav 「許す」が MV として現れている。

一方、副動詞 K 形については、MV が表わす行為に先行する行為を表わすとしているだけで、それ以上の詳細な記述はない。ちなみに、K 形が、MV が表わす行為に先行する行為を表わすだけでなく、後行する行為や同時の行為も表わすことは呉人 (2016) で指摘したとおりである。

不定詞 K 形と副動詞 K 形の関係については、同音異義であるとのみ述べている。このように、コリヤーク語の不定詞と副動詞の違いに関する記述は乏しい。そこで以下では、チュクチ語の不定詞と副動詞に関する Скорик (1977)、Dunn (1999) の記述を補完的に参照する。

3.2. Скорик (1977)

Скорик (1977) は、チュクチ語の不定詞 K 形が共起する MV には、1) 意思表示 (vetγecemγom 「決める」、teγeγ 「望む」、ineivikv 「命じる」、ranotawη 「禁じる」、cəγγ 「招待する」)、2) 心理的・身体的状態 (ηərkəll'at 「恥ずかしがる」、ajəlyat 「恐れる」、peγivet 「疲れる」、ləvav 「できない」、cimγu 「考える」)、3) 行為の開始と終了 (ηijqeyt 「なる」、paa 「止める」、ənqor 「始める」、pələtku 「終わる」)、5) その他 (vinret 「手伝う」、kiməltet 「遅れる」、γaycav 「急ぐ」、tenmav 「準備する」) などがあるとしている。

不定詞 K 形と副動詞 K 形の関係については、いずれも形式的には同じ場所格接尾辞に由来していることから、単一の起源を有することは認めている。しかし、共時的には機能が明らかに異なるため、単一の文法形式であるとは言えないとしている。その根拠として次の例 (11) を挙げ、omav-ə-k は副動詞、terγat-ə-k は不定詞であり、両者の機能の違いは自明であるとしている (例文のローマ字転写とグロスは、本稿筆者による)。

¹¹ たとえば、言語学用語辞典である Ахманова (1969:182) では、不定詞を「人称、時制、数、法などの文法カテゴリーとは無関係に、最も抽象的に当該の動作 (状態、過程) を表す動詞の名詞的形式」であると定義づけている。

- (11) nenənə omav-ə-k pa-a-γʔe teryat-ə-k.
 child(ABS.SG) become.warm-E-LOC stop-PFV cry-E-LOC

「子供は暖かくなったら泣きやんだ」

(Скорик 1977: 137)

しかし、実際にどのような点で機能が異なるのか、なぜ両者の違いが自明であるかについては言及がなく、主観的な記述に終わっていると言わざるをえない。

3.3. Dunn (1999)

一方、Dunn (1999) は、チュクチ語の不定詞 K 形と副動詞 K 形の違いを、形態、統語の両面から客観的に示すことを試みている。その見解を表 1 にまとめて示す。

表 1 チュクチ語の不定詞と副動詞の形式的違い (Dunn 1999:134 に基づく)

	不定詞	副動詞
名詞項との照応	×	×
時制・アスペクト	×	相対時制・アスペクト
MV と同一の名詞項	○	○/×

まず、名詞項との照応については、不定詞 K 形も副動詞 K 形も名詞項の人称・数標示を行わないため、Dunn (1999) の指摘のとおりである。次に、時制・アスペクトについては、不定詞 K 形も MV の時制・アスペクトに依存しているという点では副動詞 K 形と同様であるのに、副動詞 K 形だけを相対時制・アスペクトであるとするのには疑問が残る。

本稿にかかわる点で問題となるのは、副動詞 K 形の場合には MV と同一の名詞項の支配が義務的ではない（すなわち、表 1 の「○/×」）とする点である。言い換えれば、副動詞の場合には、MV と異なる名詞項を取ることもあれば、同一の名詞項を取ることもあるということである。不定詞 K 形は MV と同一の名詞項と取るとしているため、副動詞 K 形が MV と異なる名詞項を取る場合には区別が可能である。しかし、もし副動詞 K 形も MV と同一の名詞項を取るとなると、不定詞 K 形と副動詞 K 形を区別する基準がないことになってしまう。このことから、Dunn (1999) の基準は、不定詞 K 形と副動詞 K 形を区別するには十分でないことがわかる。

加えて、Dunn (1999: 240) は、上述のように不定詞は MV と義務的に同一の名詞項を取る（‘obligatory shared arguments with matrix verb’）としているにもかかわらず、Smain=Sinfinitive や Amain=Ainfinitive だけでなく、Smain=Oinfinitive, Omain=Sinfinitive のパターンも不定詞に含めている。このように不定詞と MV の名詞項の取り方を異なる格支配を受ける名詞にまで広げた結果、両者の境界も曖昧になってしまっている。

4. データ分析

以上のように、Жукова (1960:1972), Скорик (1977), Dunn (1999) では、不定詞と副動詞の違いが必ずしも説得力のある根拠により示されてきたとはいえない。そこで、以下では、従来の不定詞、副動詞からはいったん離れ、まずは筆者が収集してきたコリャーク語の語りと民

話のテキストである Kurebito (ed.)(2014, 2017, 2018, 2019) から網羅的に K 形を収集し、分析をおこなう。

分析にあたっては、不定詞 K 形と副動詞 K 形は同一形式であり、かつ、いずれも副詞的にふるまうことから両者は連続しているが、MV との統語的な結合の仕方により違いが生じる可能性があるかと予測する。判断基準としては、次の 3 点を設定する。

- 1) K と MV の配列順序
- 2) K と MV が取る名詞項の同一性の有無
- 3) K と MV の間に配置可能な語

なお、K 形は MV との共起頻度が圧倒的に高いものの、少数ながら形容詞や副詞とも共起する例も見られる。しかし、これらについては別稿で論じることとし、本稿では MV と共起する K 形に焦点をあてて考察をおこなう。

4.1. K 形と MV の配列順序

テキストから網羅的に収集した K 形は計 576 例である。この中には、MV と共起する 544 例以外に、形容詞と共起する 14 例と副詞と共起する 18 例が含まれる。しかし、上述のとおりこの 32 例は除外し、MV と共起する 544 例を対象にする。まず、1) の K 形と MV との配列順序について、K 形が MV に後置される MV-K 型と前置される K-MV 型に分けて見る。結果は、表 2 K と MV との配列順序に示すとおりである。

表 2 K と MV との配列順序

配列順序のタイプ	MV-K	K-MV
数 (割合)	355 (65%)	189 (35%)
合計	544 (100%)	

表 2 からは、MV-K 型、K-MV 型のいずれもが均等とは言えないが分布しており、配列順序の違いがなんらかの意味を持つことが予想される。ただし、その違いがそれぞれ不定詞と副動詞に対応していると断定する根拠は、現時点では見い出せない。

4.2. K 形と MV が取る名詞項の同一性の有無

次に、K 形と MV がそれぞれどの名詞項を取るのかを、MV-K 型、K-MV 型別に見る。結果は、表 3 に示すとおりである。自動詞主語は S、他動詞主語は A、他動詞目的語は P と略す。便宜的に MV-K 型で名詞項の組み合わせの多い順に上から並べて示す。左端の記号は、MV-K 型ならば、ハイフンの左が MV、右が K、K-MV 型ならば、ハイフンの左が K、右が MV の取る名詞項であることを意味する。

表 3 配列順序による名詞項の同一性の有無

	MV-K	K-MV
S-S	243	27
A-A/P-P	91	15
A-S	15	2
一致なし	3	61
P-S	3	8
S-A	0	52
S-P	0	17
P-A	0	1
A-A/P≠P	0	6
小計	355	189
合計	544	

表 3 からは、MV-K 型では全 355 例のうち 334 例、すなわち 94% という有意な割合で自動詞では S-S、他動詞では A-A/P-P の一致が見られることがわかる。また、このような一致は、「不定」の K 形の取る名詞項を MV が代わりに標示しているという意味で、MV と K 形の統語的結合度の高さをうかがわせるものである。すなわち、MV-K 型という配列順序と MV と K 形の統語的結合度の高さは相関していると考えられる。

それぞれの例はすでに上述の (1)~(4) で「一般にコリャーク語で不定詞 K 形とされる」例として見たとおりであるが、ここでは補足的に別の MV による例を示す。(12) は MV が自動詞 *ʕanqacʕal* 「欲しない」、(13) は他動詞 *plitku* 「終える」の例である。(12) では自動詞 K 形の *jalyət-ə-k* 「移動する」の主語の人称・数 (1 人称複数) が MV の *ʕanqacʕal* 「欲しない」の側に標示されている。また、(13) では他動詞 K 形の *jəjitʕev-ə-k* 「なめす」の主語と目的語の人称・数 (1 人称複数/3 人称複数) が MV の *plitku* 「終える」の側に標示される。

(12) *muju mət-ko-ʕanqacʕal-la-ŋ jalyət-ə-k.*
 1PL.ABS 1PL.S-IPFV-dislike-PL-IPFV move-E-LOC
 「私たちは移動したくなかった」 (2014:4-69)

(13) *mət-ku-plitku-ŋ-new jəjitʕev-ə-k.*
 1PL.A-IPFV-finish-IPFV-3PL.P tan-E-LOC
 「私たちは (それらを) なめし終わっている」 (2016:22-15)

一方、K-MV 型では 41 例、すなわち全体の 16% に S-S, A-A/P-P の完全な一致が見られるのみであり、それ以外のパターンも広く分布している。このことから、K-MV 型では、取る名詞項の一致は必須ではないことがわかる。言い換えれば、K-MV という配列順序と K 形と MV の統語的結合度の高さは相関しない。(14) は S-S の例、(15) は A-A/P-P の例である。

- (14) **jajtetəŋ tǎle-k t-ə-ŋvo-k cetkejuŋ-ə-k.**
 home go-LOC 1SG.S-E-begin-1SG.S think-E-LOC
 「家に帰ってから、私は考え始めた」 (2016:16-16)
- (15) **ekilu ju-kkə pəce na-ko-pan-ŋ-ə-naw.**
 if eat-LOC for.the.moment INV-IPFV-boil-IPFV-E-3PL.P
 「もし食べるなら、彼らはそれらをまず煮る」 (2016:15-8)

一方、(16) は S-A、(17) は P-A、(18) は S-P、(19) は一致なしの例である。

- (16) **enolat-wal enolat-ə-k t-ə-ko-java-ŋ-ə-n.**
 cut-knife(ABS.SG) cut-E-LOC 1SG.A-E-IPFV-use-IPFV-E-3SG.P
 「私は裁断用ナイフを裁断する時に使う」 (2017:32-4)
- (17) **tǎvet-ə-k n-ə-jjik-ə-ŋew ko-pʃa-ŋvo-la-ŋ.**
 stretch-E-LOC PRP-E-soft-E-ADV IPFV-dry-HAB-PL-IPFV
 「伸ばしたら、それらは乾燥しても柔らかい」 (2017:41-5)
- (18) **tite wənəkjəŋe-w ʃajŋa-ŋvo-k mel'-yilul**
 when stud.reindeer-ABS.PL rut-INH-LOC little-locked.in.one.place
mət-ko-n-ʃajŋa-lʃ-aw-ŋəvo-ŋ-naw.
 1PL.A-IPFV-CAUS-rut-PTCP-CAUS-HAB-IPFV-3PL.P
 「種トナカイが発情し始めると、私たちは彼らをほとんど一か所で発情させる」
 (2017: 36-16)
- (19) **əmʃu ŋejŋej-juʃ-ə-k ənkaŋ ye-lle-te.**
 alright autumn-begin-E-LOC here COM-take-COM
 「よし、秋になったら、こっちに連れてこい」 (2019:79-9)

さらに、MV-K 型に現れる MV の大半は、管見の限りでは **ŋvo** 「始める」、**plitku** 「終わる／終える」、**pkav** 「できない」、**ʃenqev** 「やめる」、**jəcav** 「急ぐ」、**tyemat** 「試みる」、**kav** 「慣れる」、**mitətvi** 「できるようになる」、**cetkejuŋ** 「考える」など少数の動詞に限られている（うち、**ŋvo** 「始める」が圧倒的に多く 273 例で、MV-K 型全体の 77% を占める）。一方、K-MV 型には MV の種類に制限がない。

以上から、MV-K 型と、K 形と MV の取る名詞項の同一性の有無や出現可能な MV の種類には相関関係があるのに対し、K-MV 型では、K 形と MV が取る名詞項の一致は義務的ではなく、MV の種類にも制限がないことがわかる。Dunn (1999) は、副動詞 K 形が MV と同一の名詞項を取ることを否定していないにもかかわらず、その場合の不定詞 K 形との違いを示していない。しかし、K 形と MV の配列順序を考慮に入れるならば、この問題は解消される。

4.3. MV と K 形間の配置可能性

次に、別の観点から K 形と MV の間の統語的な結びつきを見る。もし MV-K 型の方が K-

MV 型よりも統語的結合度が高いのであれば、MV-K 型の方が、K 形と MV の間に他の語が配置されにくいことが予想される。そこで、両者の間に別の語が配置可能か否か、またもし配置可能であるならば、それはどのような語なのかを MV-K 型・K-MV 型別に見て比較する。結果は表 4 に見るとおりである。

表 4 MV と K 形間の配置可能性

		MV-K 型	K-MV 型
名詞	自動詞主語	○	○
	他動詞主語	○	○
	他動詞目的語	○	○
	場所格	○	○
	道具格	○	○
	方向格	○	○
	与格	○	○
	様態格	○	○
	沿格	○	○
副詞	○	○	
接続詞	×	○	

予想に反して、MV-K 型でも、名詞については名詞項から斜格を取る付加詞までいずれの語も配置可能であることが明らかになった。下では K 形と MV の間に自動詞主語 tumy-u 「友達が」(20)、他動詞主語 l'aŋe-na-k 「リャゲが」(21)、場所格 mily-ə-k 「火に」(22) が配置された MV-K 型の例を挙げる。

- (20) niwlev-ə-k ko-ŋvo-la-ŋ tumy-u **ejeŋu-yili-k** qəjəm ewən yəmmo
 early.spring-E-LOC IPFV-begin-PL-IPFV friend-ABS.PL fish-search-LOC impossible 1SG.ABS
 jaqam va-nv-ə-ŋ.
 at.once be-place-E-DAT
 「初春に友達が魚釣りに出かけ始めると、私もじっとしてられなかった」
 (2017:52-2)
- (21) ənte ya-ŋvo-len l'aŋe-na-k **jəyəjulev-ə-k** wəŋe-k,
 daughter-in-law(ABS.SG) RES-begin-3SG.S L'age-AN-LOC(ERG) teach-E-LOC sew-LOC
 junet-ə-k.
 live-E-LOC
 「リャゲは嫁に裁縫や生活の方法を教えるようになった」
 (2014:5-70)
- (22) ko-pkaw-la-ŋ mily-ə-k **wəjaŋt-ə-k**.
 IPFV-be.unable-PL-IPFV fire-E-LOC get.through-E-LOC
 「彼らは火をくぐり抜けることができなかった」
 (2018:59-28)

副詞の配置も可能である。

- (23) *ŋanqo ŋavətqat-pil' ew-ŋəvo-j, 'γəmmo əno t-ə-je-ŋenqev-ə-ŋ*
 after.that daughter-DIM(ABS.SG) say-INH-PFV 1SG.ABS well 1SG.S-E-FUT-stop-E-FUT
ən'ŋəŋan it-ə-k.'
 in.this.way be-E-LOC
 「その後、娘は言った。「私はもう二度とそんなことはしないわ」 (2014: 4-447)

名詞と副詞が共起したり、複数の副詞が同時に出現したりすることも可能である。(24) では、MV と K 形の間副詞 *evən* 「どうしても」、場所格名詞 *ŋitu-k* 「雁に」が配置されている。(25) では、自動詞主語 *ŋujemtewilŋ-u* 「人々が」、副詞 *ewəncam* 「いずれにせよ」、*ən'ŋəŋan* 「このように」が配置されている。

- (24) *wellə γe-cetkejuŋ-lin evən ŋitu-k ta-ŋawt-ə-ŋ-ə-k.*
 raven-ABS.SG RES-think-3SG.S at.every.cost goose-LOC make-wife-E-make-E-LOC
 「カラスがどうしても雁を嫁にしようと考えた」 (2018:58-1)
- (25) *γa-ŋvo-lenaw ŋujemtewilŋ-u ewəncam ən'ŋəŋan junet-ə-k a-kimitŋa-ka.*
 RES-begin-3PL.S man-ABS.PL anyway in.this.way live-E-LOC not-clothes-not
 「こうして人々は服を着ないで暮らすようになった」 (2018:68-6)

しかし、MV-K 型と K-MV 型では、現れる副詞に違いが認められる。すなわち、MV-K 型では、副詞は K 形を修飾する様態副詞が多いのに対し、K-MV 型では、MV を修飾し、K 形と MV の間の事態の展開・転換を表わす時間副詞が多い。このような時間副詞は MV-K 型では見られない。(26)(27) は MV-K 型の例である。(26) では、MV と K 形の間 K 形を修飾する様態副詞 *omakaŋ* 「いっしょに」が、(27) では *əcyel'vəŋ* 「互いに」が配置されている。

- (26) *el'ŋa-w t-ə-ku-ŋejŋew-ŋ-ə-new, 'mət-ko-ŋvo-la-ŋ omakaŋ*
 woman-ABS.PL 1SG.A-E-IPFV-call-IPFV-E-3PL.P 1PL.S-IPFV-begin-PL-IPFV together
pəŋon-o-k.'
 mushroom-cat-LOC
 「私は女たちを呼んで言った。「いっしょにキノコを食べ始めるよ」」 (2016:13-11)
- (27) *vəŋajok γa-ŋvo-lenat əcyel'vəŋ tanŋəcet-ə-k.*
 later RES-begin-3DU.S each.other fight-E-LOC
 「その後、彼らは互いに戦い始めた」 (2019:86-2)

一方、K-MV 型では、(28) の *vəŋajok* 「その後」、(29) の *vitku* 「(~たら) ようやく」、(30) の *jaqam* 「すぐに」のように、時間副詞が配置されうる。

- (28) **cekl'atko-jv-ə-k** vəʃajok ko-vety-al-la-ŋ.
beat.hard-INT-E-LOC later IPFV-straight-VBL-PL-IPFV
「強く叩くと、その後、(トナカイたちが) 整列するようになる」 (2017:43-28)
- (29) **utyet-ə-k** vitku ne-ku-kejitku-ŋ-new.
become.crumbly-E-LOC for.the.first.time INV-IPFV-cut.something.into.small.pieces-IPFV-3PL.P
「柔らかくなったら、ようやく彼らはそれらを細かく刻む」 (2014:4-325)
- (30) 'q-ən-əl'ap-la-jkəne-tək, kitkit miŋki **inini-k** jaqam
2S.OPT-fish-watch-PL-OPT-2PL.S as.soon.as where appear.out.of.the.water-LOC at.once
q-ə-komŋa-la-jkəne-tək.'
2S.OPT-E-scream-PL-OPT-2PL.S
「よく魚を見ているんだぞ。(魚が) 水の中から出てきたらすぐに叫ぶんだぞ！」
(2014:9-55)

さらに、MV-K 型では、接続詞が MV との間に配置された例が一例も見られないのに対し、K-MV 型では義務的ではないが、接続詞が配置されうる点も注目される。たとえば、(31)(32) の接続詞 ʃam 「すると」は、そこから事態に新たな展開・転換があることを示していると考えられる。

- (31) **pəʃa-k** ʃam ko-ŋvo-ŋ-ne-n tejk-ə-k cawat-o, qoja-votelŋ-o,
dry-LOC then IPFV-begin-IPFV-3SG.A-3PL.P make-E-LOC lasso-ABS.PL reindeer-rope-ABS.PL
qojelŋ-o.
headgear-ABS.PL
「それらが乾くと、彼は投げ輪やトナカイの繋ぎ紐やおもがいを作り始める」
(2017:42-28)
- (32) yətya **jəplepav-ə-k** ŋelvəʃ-u ʃam ləqləŋ-kə jatan
in.late.autumn direct-E-LOC reindeer.herd-ABS.PL then winter-LOC only
yakaŋ-ə-lʃ-at-ŋiŋ-ə-n ku-nʃel-ə-ŋ.
reindeer.sledge-E-PTCP-VBL-NML-E-ABS.SG IPFV-become-E-IPFV
「晩秋に群れをルートに方向づけたら、あとは冬にトナカイで行くだけだ」
(2017:42-60)

4.4. まとめ

以上、K 形のふるまいを観察した結果、次の点が認められた。

- (a) K 形と MV の配列順序と両者が取る名詞項の同一性には、一定の相関性がある。すなわち、MV-K 型では、同一の名詞項を取る例が 94% と有意に高いのに対し、K-MV 型ではそのような偏りは見られず、様々なパターンが分布している。
- (b) MV-K 型でも、K-MV 型でも K 形と MV の間に様々な名詞項や斜格名詞が配置されうる点は共通している。一方、副詞は前者では K 形を修飾する様態副詞が、後者では MV を修飾する時間副詞が現われる傾向があるという点で違いがある。さらに、

後者のみに事態の展開・転換を表わす接続詞が現れる。

- (c) MV-K 型では現れる動詞の種類が限られているが、K-MV 型では制限がない。
- (d) 以上から、K 形に次の二つのタイプ（便宜的に、I タイプ、II タイプ）を両極として想定することができる。
 - ①MV-K 型で、K 形と MV が取る名詞項が同一であるタイプ（=I タイプ）
 - ②K-MV 型で、K 形と MV が取る名詞項が同一ではないタイプ（=II タイプ）

I タイプの典型としては、次の (33) のような例があげられる。ja-n-vety-aw-η-ə-k「真っすぐに行かせる」は他動詞で主語と目的語の 2 項を取り、その人称・数（1 人称単数／3 人称複数）が MV の側で標示される。

- (33) ηəjoq ʒətʃ-u t-ə-ηvo-naw ja-n-vety-aw-η-ə-k.
 three dog-ABS.PL 1SG.A-E-begin-3PL.P try-CAUS-straight-CAUS-try-E-LOC
 「私は 3 匹の犬を真っすぐ行かせるように（調教）し始めた」 (2016:17-32)

このような典型的な構文を基盤とし、MV と K の間に (21)~(26) で見たような名詞項、斜格名詞、様態副詞などが配置される文も、I タイプに該当する。

一方、II タイプの典型としては、次の (34) のような例があげられる。K 形の天候を表わす自動詞 om-joʃ-ə-k「暖くなる」は、定形動詞では形式主語として 3 人称単数を標示する。一方、MV の ləyan「とかす」は他動詞で 3 人称複数主語と 3 人称複数目的語を標示する。したがって、K と MV が取る名詞項はまったく一致しない。

- (34) om-joʃ-ə-k na-ko-ləyan-ηəvo-η-naw.
 warm-begin-E-LOC INV-IPFV-melt-HAB-IPFV-3PL.P
 「暖かくなったら、彼らはそれらをとかす」 (2016:31-9)

このような典型的な構文を基盤として、(29)~(33) で見たような時間副詞や接続詞が配置される文も、II タイプに該当する。

しかしながら、K 形は I タイプと II タイプに截然と分けられているわけではなく、次節で見るように、両者の中間的な特徴を示す K 形がわずかながら観察される。このことから、K 形は I タイプから II タイプへと連続相をなしていることが考えられる。K 形が名詞的用法や形容詞的用法を持たず、もっぱら副詞的にふるまうことを考えれば、このような連続性は自然なこととも言える。

5. 逸脱例

本節では、I タイプからも II タイプからも逸脱する K 形の例を見る。ただし、得られた例が少ないために、逸脱の要因になる明確な根拠を示すことは現時点では難しいことを断っておく。逸脱例としては、①MV-K 型でありながら K 形と MV が取る名詞項が同一でない場合、②同一 MV でありながら MV-K 型と K-MV 型でゆれが見られる場合がある。

まず、①について見る。該当する例は上表3で見るとおり21例で、全MV-K型の6%である。まず、K形がMVの付帯状況を表わしていると考えられる例をあげる。(35)ではMVの他動詞ta「過ごす」のAは、K形の自動詞vetat「働く」のSに対応するが、K形にはPに対応する項がない。(36)ではMVの他動詞n-γəjol-aw「教える」のPは、K形の自動詞ŋewen「縫う」のSに対応するが、K形にはAに対応する項がない。

(35) amu ŋəcceq ɣivi-w t-ə-ta-nat **vetat-ə-k.**
 probably two year-ABS.PL 1SG.A-E-spend-3DU.P work-E-LOC
 「おそらく私は働いて2年間を過ごした」 (2016:16-41)

(36) əllŋ-a waca k-ena-n-γəjol-aw-ŋəvo-ŋ **ŋewen-ə-k.**
 mother-INS(ERG) sometimes IPFV-1SG.P-CAUS-learn-CAUS-HAB-IPFV sew-E-LOC
 「母は時々私に裁縫を教えてくれた」 (2014:8-8)

MVがplitku「終わる／終える」の同様の逸脱例も見られる。plitkuは上の(13)に見るように、MV-K型でかつK形とMVが取る名詞項が同一である場合のMVとして用いられる。すなわち、Iタイプである。比較のために、(13)の例を再掲する。ここでは他動詞jəjitŋew-ə-k「なめす」のAとPがplitkuの側に標示されている。

(13') mət-ku-plitku-ŋ-new **jəjitŋew-ə-k.**
 1PL.A-IPFV-finish-IPFV-3PL.P tan-E-LOC
 「私たちは(それらを)なめし終わる」 (2016:22-15)

ところが、次の(37)では、MVのplitkuは他動詞としてŋəjaq klas-o「4学年」をPとして取るが、一方、K形のkalicitは自動詞であるため取らない。この場合、K形は、MVのplitkuに対して、どのように4学年を終えたのかという付帯状況を表わしているのである¹²。

(37) jatan ŋəjaq klas-o t-ə-plitku-new **kalicit-ə-k.**
 only four class-ABS.PL 1SG.A-E-finish-3PL.P study-E-LOC
 「私は勉強して4学年だけ終えた」 (2014:4-108)

さらに、K形、MVの取るどの名詞項も一致しないMV-K型も2例得られた(38)(39)。この場合には、K形の冒頭に接続詞məjew「なぜならば」、tite「時」が付加され、両者の意味的繋がりが明示されていることに注目されたい。

(38) pəlak-ə-t ɣa-mal-qit-ə-lenat ləyan məjew **jaleko-k** qejal'ɣ-ə-ciko.
 boot-E-ABS.DU RES-very.much-freeze-E-3DU.S even because slide-LOC coldness-E-inside

¹² このような付帯状況は、ロシア語では不完了体副動詞 -я/-а で表される意味に近く (e.g. Он сидит у окна, читая журнал. 「彼は雑誌を読んで窓辺にすわっている」)、MV-K型は、ロシア語の副動詞の意味範囲にも及んでいるといえる。

「ブーツは寒い中を櫓すべりしたので、かちこちに凍ってさえた」 (2016:11-17)

- (39) *ənniw-ə-ne-k k-in-iv-ə-ŋ, 'ŋejaŋ yəcci ŋelvəlf-ə-k*
 uncle-E-AN.SG-LOC(ERG) IPFV-1SG.P-say-E-IPFV then 2SG.ABS herd-E-LOC
jiləlf-u q-ə-vetat-eke, tite melyətanŋ-o jet-ə-k.'
 translator-ESS OPT.2SG.S-E-work-OPT when Russian-ABS.PL come-E-LOC
 「叔父さんは私に言った。「それなら、ロシア人が来たとき、通訳として群れで働
 きなさい」 (2016:19-16)

次に、②について見る。②に該当する MV には、*java* 「使う」、*winnet* 「助ける」、*ʕən'qecʕet* 「欲しない」が観察される。*java* 「使う」の例は 25 例あるが、うち 5 例が MV-K 型、20 例が K-MV 型である。名詞項は MV の *java* の A と K 形の S が対応している。(40) は MV-K 型の例、(41) は K-MV 型の例である。

- (40) *ləqləŋ-kə inəje-w to ujetiki-w mət-ko-java-ŋ-naw jalyət-ə-k.*
 winter-LOC cargo.sled-ABS.PL and sled-ABS.PL 1PL.A-IPFV-use-IPFV-3PL.P move-E-LOC
 「私たちは貨物用櫓や櫓を冬に移動するのに使う」 (2016:23-19)
- (41) *kinuŋva-w meməl-ə-tʕol-o, vali-w ewji-k na-ko-java-ŋ-naw.*
 meat-ABS.PL seal-E-piece-ABS.PL seal.fat-ABS.PL eat-LOC INV-IPFV-use-IPFV-3PL.P
 「彼らはアザラシの肉や脂を食用に使う」 (2014:4-272)

winnet 「手伝う」が MV の例は 6 例で、うち 4 例が MV-K 型、2 例が K-MV 型である。(42) は MV-K 型の例、(43) は K-MV 型の例である。

- (42) *t-ə-ku-winnət-ə-ŋ qoja-ŋta-k.*
 1SG.S-E-IPFV-help-E-IPFV reindeer-go.for-LOC
 「私はトナカイの放牧を手伝っていた」 (2016:19-11)
- (43) *waca qoja-yijke-k ku-winnət-ə-ŋ.*
 sometimes reindeer-catch.for.riding-LOC IPFV-help-E-IPFV
 「彼は時にはトナカイを捕まえるのも手伝った」 (2014:4-173)

ʕan'qacʕal/ʕən'qecʕet 「欲しない」は 2 例で、うち 1 例が MV-K 型、1 例が K-MV 型である。MV-K 型の例は上述の (12) である。一方、(44) は K-MV 型の例である。

- (12') *muju mət-ko-ʕan'qacʕal-la-ŋ jalyət-ə-k.*
 1PL.ABS 1PL.S-IPFV-dislike-PL-IPFV move-E-LOC
 「私たちは移動したくなかった」 (2014:4-69)
- (44) *ekilu ʕewenni-k ʕən'qecʕet-ə-k pann'a-k əcci qajuju-naly-ə-k*
 if sew-LOC dislike-E-LOC shin.skin-LOC and newborn.reindeer-fur.skin-E-LOC

mət-ko-vetal-la-ŋ.

1PL.S-IPFV-work-PL-IPFV

「もし縫い物をしたくなければ、私たちは脛皮や仔トナカイ毛皮の加工をする」

(2016: 22-11)

例を見る限りでは、MV-K 型か K-MV 型かによる意味的な違いは認められない。とすると、このようなゆれには、なんらかの談話的要因がかかわっている可能性が考えられるが、得られた例が少ないため、現時点で明確な根拠を示すことは困難である。今回はゆれの具体例として示すに留める。

6. おわりに —動詞の2つの副詞的用法として—

本稿では、従来のコリヤーク語の記述において、K 形が「不定詞」と「副動詞」を兼務するとされてきた根拠を統語的側面から探った。

データ分析の結果、K 形と MV の配列順序、両者が取る名詞項の同一性、両者の間に配置可能な語の種類などにより、大きく、(a) MV-K 型で、K 形と MV が取る名詞項が同一であるタイプ (=I タイプ) と (b) K-MV 型で、K 形と MV が取る名詞項が同一ではないタイプ (=II タイプ) という2つの対極的なタイプが見られることが明らかになった。

とはいえ、K 形は I タイプと II タイプのみに截然と分けられているわけではなく、両者の中間的な特徴を示す K 形が少数ながら観察された。このことから、K 形は I タイプから II タイプへと連続相をなしていることがうかがえた。管見の限り、K 形には名詞的用法や形容詞的用法がなく、もっぱら副詞的にふるまう。このことを考えれば、I タイプと II タイプの間の連続性は自然なこととも言える。

さて、本稿を終えるにあたって、ロシア語文法に倣って用いられてきた「不定詞」「副動詞」という用語に再び立ち返り、本稿の結果と照合しながら、その妥当性について考えてみる。I タイプと II タイプを、それぞれ「不定詞」、「副動詞」に対応させるのは、自然な帰結ともいえるかもしれない。とはいえ、副動詞とは異なる形式を持ち、副詞的にも名詞的にも形容詞的にも機能するロシア語の不定詞と、同一形式でかつもっぱら副詞的にふるまうコリヤーク語の K 形を同列に扱うことには、やはり慎重さが必要であろうと考える。

もっとも、現代ロシア語の不定詞も本来は斜格名詞に由来するとされる。すなわち、共通スラブ語の不定詞は *-ti という祖形を持っていたが、それは i 終わりの名詞語幹の与格（あるいは場所格）の単数形に対応し、目的を表わしていた。一方、目的補語 (supin) の接尾辞は *-t' という祖形を持ち、u 終わりの名詞語幹の対格単数形に対応し、動作動詞と共起して目的を同じく表わしていた。両者は、*-ti, *-t' という形式的な類似性により単一の形式に融合して、現在に至っている (Greenberg 1985)。しかし、ロシア語の不定詞は、コリヤーク語にはない名詞的用法や形容詞的用法まで発達させてきたために、K 形とは完全には対応しないのである。

以上の点に鑑みて、I タイプと II タイプは、ロシア語文法にとらわれず、現時点では「動詞の副詞的用法の2つのタイプ」として記述しておくのが妥当であるように思われる。

略号・略語

A=agent-like argument (transitive subject), ABL=ablative, ABS=absolutive, ALL=allative, AN=animate, CA=causal, CAUS=causative, COM=comitative, DIM=diminutive, DU=dual, DUR=durative, E=epenthetic, ERG=ergative, FUT=future, GEN=genitive, HAB=habitual, INH=inchoative, INS=instrumental, INT=intensifier, INV=inverse, IPFV=imperfect, LOC=locative, NML=nominalizer, P=patient-like argument (transitive object), OPT=optative, PFV=perfect, PL=plural, POT=potential, PTCP=participle, PRP=property predication, RES=resultative, S=single argument (intransitive subject), SG=singular, VBL=verbalizer

参考文献

- Anderson, G. D. S. (2006) Towards a typology of the Siberian linguistic area. In Y. Matras, A. McMahon and N. Vincent (eds.) *Linguistic areas: Convergence in historical and typological perspective*, 266-300. Houndmills: Palgrave Macmillan.
- Ахманова, О. С. (1969) *Словарь лингвистических терминов*. Москва: Издательство «Советская Энциклопедия»
- Dunn, M. J. (1999) A grammar of Chukchi. A thesis submitted for the degree of doctor of philosophy of Australian National University.
- Greenberg, G. R. (1985) The syntax and semantics of the Russian infinitive. A thesis submitted for the degree of doctor of philosophy of Cornell University.
- Haspelmath, M. (1995) The converb as a cross-linguistically valid category. In Haspelmath, M. and König, E. (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*, 1-55. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Ярцева, В. Н. и др. ред. (1990) *Лингвистический энциклопедический словарь*. Москва: Советская энциклопедия.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1995) 『言語学大辞典 第6巻 述語編』東京：三省堂。
- Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. and Muravyova, I. A. (2004) *Language and folklore of the Alutor people*. ELPR Publication Series A2-042. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 呉人惠 (2016) 「コリヤーク語の副詞節：名詞化タイプと非名詞化タイプ」『北方言語研究』6:1-23.
- Kurebito, M. (ed.) (2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2017) *Koryak Text 3*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2018) *Koryak Text 4*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. (ed.) (2019) *Koryak Text 5*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Nedjalkov, V.P. (1995) Some typological parameters of converbs. In Haspelmath, M. and König, E. (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*, 97-136. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 小野智香子 (2021) 『イテリメン語文法—動詞形態論を中心に—』札幌：北海学園大学出版会。
- Скорик, П. Я. (1977) *Грамматика чукотского языка II*. Москва/Ленинград: Издательство АН СССР.
- Жукова, А. Н. (1972) *Грамматика корякского языка*. Ленинград: Издательство «Наука».

The Form of Koryak That Doubles as an Infinitive and a Converb

Megumi KUREBITO
(Hokkaido Museum of Northern Peoples)

In Koryak, the suffix *-k/-kkə* ('K-form') derived from a locative case affix is thought to serve both as an infinitive and a converb when suffixed to the verb stem. The present paper explores the syntactic basis for this division of the K-form into two categories.

In this analysis, based on the expectation that the two are continuous and that differences arise due to the process of syntactically combining them with main verbs, the following three criteria are established.

- 1) The order of K-form and MV
- 2) Commonality of arguments taken by K-form and MV
- 3) Words that can be placed between K-form and MV

The data analysis reveals the following:

(a) There is a certain correlation between the order of K-forms and MVs and their adapted commonality of arguments. In other words, the MV-K type has a significantly high percentage of common arguments (94%), while the K-MV type does not show such a bias, and a variety of patterns are distributed.

(b) Both the MV-K and K-MV types commonly place various nouns including arguments and oblique nouns between the K and MV forms. On the contrary, the type of the allocated adverb depends on its affiliation towards the MV-K or K-MV type. That is, the former type tends to place modal adverbs, while the latter tends to place temporal adverbs. Additionally, a conjunction expressing an event's transition appears only in the K-MV type.

(c) The MV-K type has a limited number of verbs, while the K-MV type has no restrictions.

The above analysis leads to the following assumption of Type I and Type II as the two extremes of the K-form.

- A) MV-K type, in which the arguments taken by the K-form and MV are common (Type I).
- B) K-MV type, in which the arguments taken by the K-form and MV are not common (Type II).

However, K-forms are not divided only into Type I and Type II, but a few of them also show intermediate characteristics between the two. Considering that K-forms do not have nominative or adjectival usage, but are exclusively adverbial, such a continuity is natural.

Deviations from the above can be seen in the following cases where, (1) despite the MV belonging to the MV-K type, there is no commonality between the arguments taken

by the K form and the MV, and (2) the same MV shows fluctuations between MV-K and K-MV types. However, due to the small number of data, clarifying the causes of such deviations is a scope for future study.

One option would be to consider types I and II as ‘infinitives’ and ‘adverbs,’ respectively, for the sake of convenience. Nevertheless, we still need to be cautious about equating the Russian infinitive, which has a different form from the converb and functions as an adverb, noun, or adjective, with the Koryak K-form, which has the same form and behaves exclusively as an adverb. At present, I think it is appropriate to describe the I and II types of K-forms as ‘two types of adverbial usage of verbs.’

(くれびと・めぐみ kurebito@hoppohm.org)